

# 銘木市に見る北海道産広葉樹材

## (1)連載にあたって

道総研林産試験場 佐藤 真由美



北海道に本格的に開拓の手が入ってから150年余り、手つかずの広大な森林資源は、農地開拓の支障木であった一方で、土木建築用材あるいは燃料として、そして、木材を身近に愛でて使う文化背景を持つ日本人には、貴重材である本州以南の広葉樹銘木の代替材料としても利用されてきました。北海道産広葉樹材といえば、本州以南の人々にとっては憧れの存在であるらしく、「数百年を風雪に耐えて育った、世界に一つしかない逸品」といったキャッチフレーズが百貨店や家具店のパンフレットに見られたりします。

一方で「天然林の商業伐採は環境破壊」という声も上がり、産業用資源が天然木から人が植えて数十年の人工林材へと移り変わってきました。育林が難しい広葉樹は、針葉樹人工林材に比べて、調査研究、技術開発の対象となることは少なく、林産試験場での研究課題となることが少ない状況になっていました。この間、業界では、日本文化の中で培われた伝統技術に新しい工夫を重ね、独自に冒頭にあげたような広葉樹材についての高評価を確立してこれたと思います。

最近になって、林産試験場でも広葉樹材の新たな用途に着目し、注目するようになってきました。学生時代には、ひたすら広葉樹材の顕微鏡観察をしながら、林産試験場ではほとんど人工林カラマツ・トドマツの研究に携わってきた筆者も、ここに来てようやく、地元、旭川市で開催されている「北海道産広葉樹銘木市（以下、「銘木市」という。）」という原木市

売り市場<sup>1)</sup>に足を運ぶようになったところです。

この度、ウッドエイジに広葉樹材に関する記事を連載する機会をいただきました。「銘木市に見る北海道産広葉樹材」というタイトルは、以前、木材工業誌に執筆した主要樹種の概説記事タイトル<sup>2)</sup>とほぼ同じです。今回は、木材工業の記事に記述したタモ、マカバ、ナラといったものから、以前はパルプ材が主な用途だったような比較的小径の樹種まで、また、「北海道産」ではありませんが人気の的となっている輸入材樹種も含めて、銘木市に並ぶ樹種の中から毎回一つを取り上げ、その材質や用途などについて筆者の知るところ、思うところを紹介していきたいと考えています。

### ■参考文献

- 1) 高橋秀樹：木材工業，71(10)，387(2016)。
- 2) 佐藤真由美：木材工業，71(10)，416-419(2016)。



銘木市展示会場に並ぶ原木（2021年3月）



真剣に原木を吟味するバイヤー（2021年2月）



目利きの学校：製材会社の若手たち（2021年3月）